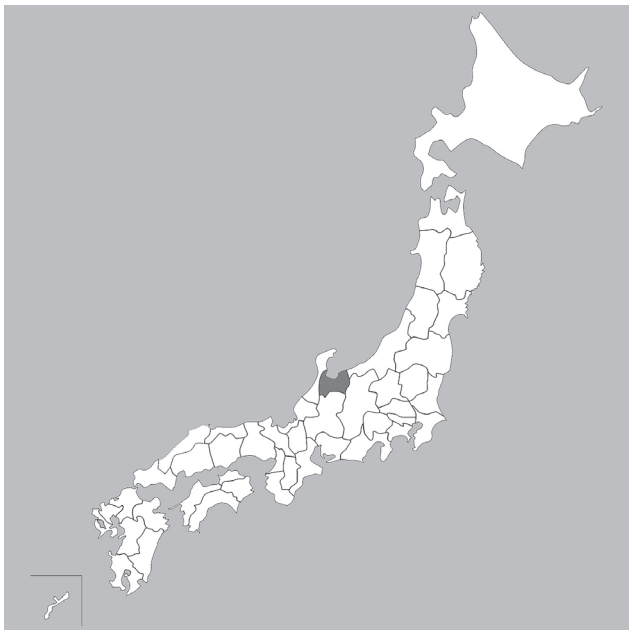
富山県 南砺市



自治体基礎データ

人口(2019年４月末)　50,777人

面積　668.64㎢

未就学児童数(5歳以下)と世帯数　1,883人　1,401世帯

出生数　2017年度: 276人　2018年度: 291人

合計特殊出生率　2017年度: 1.50　2018年度:

人口流出入数　2017年:　人　2018年:　人

未就学児童の年齢別数と保育状況

5歳児: 1号認定　12人　2号認定　331人　在宅　人

(2019年 4月時点)

4歳児: 1号認定　21人　2号認定　299人　在宅　人

3歳児: 1号認定　12人　2号認定　306人　在宅　人

2歳児: 3号認定　258人　在宅　35人

1歳児: 3号認定　226人　在宅　76人

0歳児: 3号認定　26人　在宅　258人

子ども・子育て支援及び高齢者対策を巡る自治体の特徴

南砺市合併は平成 16年 11月 1日、ちょうど 15年になる。合併時の人口は 59,230人だったが、年々減少傾向。少子化も進んでいる。近年は、ひと学年 300人余りから 300人を切る傾向。下りカーブをいかに緩くしていくか。今年度、第二次総合計画を策定していく中で、今後どのような事業を進めていくかが課題。

保育所待機児童数

【保育所・認定こども園・幼稚園・地域型保育設置状況】(2019年 4月時点)

保育園: 公立 11園　私立 1園

認定こども園: 計 3園　(公立 1園　私立 2園)

(幼保連携型 2園　幼稚園型 0園　保育所型 1園　地方裁量型 0園)

幼稚園: 公立 0園　私立 0園

子ども・子育て支援関連予算額

2017年度: 2,090,718,963円(給与費除く)

2018年度: 2,152,230,611円(給与費除く)

それぞれの施策を進めるための庁内体制について(庁内組織数、参画部署名)

市民協働部南砺で暮らしません課

地域包括医療ケア部地域包括ケア課、福祉課、健康課、保健センター

教育部こども課

子ども・子育て支援事業について(地域子育て支援 13事業及び母子保健の実際)

①利用者支援事業

②地域子育て支援拠点事業

③妊婦健康診査

④乳児家庭全戸訪問事業(こんにちは赤ちゃん事業)

⑤養育支援訪問事業

⑥ファミリー・サポート・センター事業

⑦一時預かり事業

⑧延長保育事業

⑨病児保育事業

⑩放課後児童クラブ

福野庁舎（市長公室があり、現時点での南砺市の本庁的位置づけ）

南砺市地域包括支援センター

南砺市の地域保健福祉の総合窓口になっている地域包括支援センター１階

幼い子どもを遊ばせるスペースも（南砺市地域包括支援センター）

南砺市へのヒアリング

1. 子育て世代包括ケアに関わる計画と事業内容

「なんとの健やか子育て支援 2019」参照
幼稚園は全て幼保連携型の認定こども園に移行済み。
南砺市内に院内保育所、企業主導型保育所等の認可外保育施設があるので、在宅児の数のうち、そうした施設に通っている子どももいる。
子ども・子育て支援事業のニーズ調査は昨年度終了。今年度は子ども・子育て支援事業計画の策定作業に入っている。
・第１期まとめる時との違いは？
幼保小の連携、発達に気がかりな子どもの継続的な支援の必要性などから、市の機構改革により平成 28 年 4 月からこども課が教育部に組織替えとなり部内の連携強化を図っている。子ども・子育て支援事業計画は次世代育成支援対策を引き継いで進めているので、関係部署が連携し修正案を作成しているところで、その後パブリックコメント。
・出生祝い金
三世代同居を推奨しており、一緒に住んでいる方（同一敷地別棟可）には家族の間の支え合いを推進するために加算して出している。将来的には事業を見直していく方向。子育てや将来的な介護など家族間の支えあいを期待している。また、高齢者のみの世帯にならないように、空き家対策、防犯面でも、ずっと親と一緒に住んでほしい。

2. 利用者支援事業

母子保健型。南砺市型「ネウボラ」推進事業を推進している。
子育て支援センターは保育園に併設。母子手帳の交付は福光保健センター、健康課保健係で常時受け付けている。必ず面談をする。（平保健センターは、金曜日午前中は常駐している。周知。）地区担当保健師を決めていて、継続的に支援をする。支援対象は妊娠期から 4 歳くらいまで（保育園などに入るまでの間）。地域で担当するため一人が何人担当するかは地域により異なる。心配なケースを主にフォロー。
南砺市には出産できる施設がない。砺波市、高岡市の病院、富山大学付属病院などで出産する。そのため、出産支援交通費を交付している。交通費は妊娠 20 週以降に申請することとなっており、申請時に体の状態や困難がないかなど面談も行う。
・マイナンバーカード連携親子支援アプリ
保護者のマイナンバーカードの個人認証機能を活用して子どもの健診や予防接種の情報・案内などを発信。電子母子手帳の機能も備えている。
・心配なケースには？
保健センターの職員　→ 市のこども課に連携　→ 児相（県の施設）
医療機関からの報告　→ こども課に報告　児相などどこが対応するか相談して連携
こども課に「女性子ども相談室」がある。職員は 4 人。ケースバイケースで対応。継続支援が必要な場合は対応。市と県の連携。こども課がハブになっている。
認定こども園とも連携。子育て支援センターとも連携。

3. 地域保健福祉をはじめとする地域づくりに対する自治体としての考え

市長のモットーは「高齢者を大事に」、「誰も取り残さない」。
保育の基本理念は子どもの育ちを支える、保護者の子育てを支える、

子どもと子育てにやさしい社会をつくる。
「富山型」の居場所は、地域共生社会の先取りで、元看護師の惣万佳代子さんが始めたサロン。みんな集まれば動ける人は作業する。みんな同じ人間としてごちゃまぜに見ようという取り組み。
南砺市では小規模多機能自治推進会議ネットワークに参画しており、地区で部会を立ち上げている。今年から始まったばかり。
子どものうちから認知症の教育をしている。「一人暮らしの認知症の方が笑顔で暮らせるまちづくり」という文を「5つのまちづくり規範」の中に掲載している。高齢夫婦のうち一人が亡くなった後などに、認知症になる高齢者もいるので、自治会単位で認知症徘徊訓練を行っている。コントをできる劇団によるレクチャー、実際街に出ての訓練も。
この地域には、人と人とのつながりを大事にする「土徳」という言葉がある。もともとの土地柄。

4. 介護及び高齢者施策と子ども・子育て支援施策との連携事例の有無

小規模多機能自治に基づく地区の部会の中には、週1回0～90歳までの集まりになっているところもある。
平成27年から小中学校に在籍中に、1回は認知症サポーター講座を行う。「認知症の方は困った人ではなくて困っている人だよ」ということを教える。三世代同居率が高い。自分のことを可愛がってくれている祖父母が将来認知症になった時の対応という意味も。
・相倉地区
Iターン、Uターンが4世帯。子どもが12人。保育園は平地域にある。スクールバスなどを使い、子どもたちは地元のおじいちゃんやおばあちゃんが面倒を見ている。若い世代が消防の訓練や獅子舞行事や、屋根の葺き替えなどにも参加している。

5. 地域保健福祉に関する協議体

市の社協とタイアップ。形の上では第2層を設置。第1層はまだ。第２層もうまく動かしきれていない。旧町村ベース。旧4町4村のまとまりを5地区の圏域に分けている。基本の単位は31地区（旧小学校）、自治振興会のような区分けがある。小規模多機能自治の一番小さな区分け。

6. 地域団体・市民活動団体・企業などとの連携の状況

一般社団法人なんと未来支援センターが中間支援として立ち上がり、婚活支援や移住定住の支援なども。センターができたことで、職員の負担は軽くなった。
医療崩壊の危機があった。平成22年に「南砺の地域医療を守る会」「マイスター」。市域が広い。民間の医療が少なくて医師の高齢化が進んでいる。住民自身が公的なものに頼らざるを得なくなってきている。市民病院が２つある（南砺市民病院・公立南砺中央病院）。砺波まで行かずに地元の病院を使うようになった。富山大学医学部の山城清二教授が、若いインターンのお医者さん、総合診療を志す人たちを送り込んでくれた。昔から住民自治をやりたかった市長が、「小規模多機能」という言葉でストンと落ちた、と。五箇山などの山間部の診療所に若い医師を派遣。

7. 生活支援コーディネーター配置と人材養成について

第２層コーディネーターとして、5名配置することとしている。
活動範囲は南砺市全域とするが、南砺市高齢者保健福祉計画に定める。日常生活圏域ごとに、それぞれ1名を配置することも可能。

回答者
地域包括医療ケア部担当部長　健康課長　社会福祉事務所長
井口一彦さん
次長　地域包括ケア課長　中家立雄さん
参事　福祉課課長　吉田孝幸さん
健康課　保健センター所長　河原洋子さん
教育部参事　こども課課長　子育て支援センター長　武田秀隆さん
市民協働部　南砺で暮らしません課　協働のまちづくり係長
勇崎香志さん

ヒアリングに伺った地域包括ケアセンターは、南砺市の保健福祉部署の総合窓口も兼ねており、ヒアリング当日は3歳児健診が行われていた。平成29年に元県立高校だった土地を譲り受けて新築した。市の機能は、保健センターほか、合併前の旧4町の施設に分散している。現在、市長室がある福野庁舎、市議会がある福光庁舎が中心機能を担っているが、2020年7月には、福光庁舎が統合した形での市庁舎になる。保健福祉部署は地域包括ケアセンターに集結させたままで継続する。
相倉地区のように、地域の高齢者が若い世代の子どもたちの面倒を見るので、子どもの数が増えている地区もあるが、旧村部では昔から人口が少なく、今も人口減少が進んでいる。保育園も1園あたりの児童数は10人から30人弱と少ない。小学校の統廃合は、福光地域で4つあった小学校が一つ減っている。平地域と上平地域の学校統合では、旧村に1校ずつあった小学校・中学校を、平地域に中学校、上平地域に小学校を置く統合を行っている。通学はスクールバスで、現在までそれを引き継いでいる。
市全体の傾向としては、若い人が平野部に降りてきていて、山間部の人口が減っている。山沿いの集落に住んでいた人が、結婚を機に旧市街地郊外の団地に移り住む。南から北に、砺波市に近い方へ若い人が移動する傾向。通勤は金沢市や富山市へも。車でJRの駅まで行って、そこから通勤する人も。福光地域は富山より金沢の方が近い。生活の足はほぼ車。免許の返納も難しい状況がある。市営のバスをきめ細かく走らせている。JRなどが撤退した路線で市営の路線を増やしている。
小規模多機能自治を始めたが、2年半の準備で始めてしまったので、まだまだこれから。他地域では時間をかけて問題を洗い出してというところもあるが、ここではスタートラインを決めてそこに合わせて始めたかたち。現状28地区で始まっていて、来年度4月には残りの3地区でも始まる予定。31地区を平等に底上げするのは難しい。先進的なところの事例を「自慢大会」という形で盛り上げて、他を引っ張っていってもらう。村社会なので、言葉の浸透度は高い。中身が何なのかというところはこれからかもしれない。
人口減少、過疎化によって起こるさまざまな困難に、一つ一つ立ち向かってきた地域。ものづくりが盛んな側面もあり、地域包括ケアセンターのある井波地区は木彫りの井波彫刻が盛んな地域。井波彫刻は欄間や衝立、仏像、獅子頭などが知られている。世界遺産の五箇山では、合掌造りを守るために、さまざまな伝統技術を受け継ぐ努力がなされ、それが新たな産業を生んでいる。手漉き和紙やシルク染など、さまざまな手仕事が受け継がれてきた。その勤勉さもあるのだろうか、貧困

率はそれほど高くない。統計的にも４～５％の間。富山県は生活保護率も日本一低く、持ち家率も高い。収入に対して支出が低いので手元に残りやすいという。

行政ヒアリングで出てきた、この土地の人と人とのつながりを大事にする「土徳」という人柄に、実際に触れることができた。本文中にも出てきた富山型のごちゃまぜの居場所については、砺波市、射水市の居場所を視察、意見交換なども行なった。南砺市にも素敵な居場所があり、砺波市などのヒアリングの際に ponte とやまの加藤愛理子さんとともにご案内くださった中山明美さんは南砺市で「ほっこり南砺」というみんなの居場所を運営、民泊事業も手がけていらっしゃる。行政へのヒアリング終了後にお邪魔したところ、子育て支援のために家を建てたという木下三喜子さんをご紹介くださった。

田んぼが広がるところに瀟洒な２階建ての家があり、１階の半分を木下さんのお子様がカフェとして営業、もう半分を居場所スペースに、２階には体を動かすスペースと研修スペースとして使っているという。「だれでもハウスめぐみ」と名付けられたスペースは、「赤ちゃんからお年寄りまで、誰でも気軽に遊びにきていただいて、遊びながらまた語らいながら心を明るく軽くしていただきたい」と始めたそう。木下さんは長く保育士をしていらして、長年親子に接しながら、子どもと親の置かれた環境が次第に厳しくなり、支えること、共に歩んでいける環境づくり、実際に働きかけられる場づくりが必要だと思うようになったという。

２階の研修スペースでは、発達が気になるお子さんと親向けなど、親と子の暮らしが少しでも明るく軽くなるための学習会を開催している。基本交流スペースはノンプログラムだが、手品を披露してくださるなど、地域の人が訪れたり、野外での活動や、２階の体を動かすスペースでのリズム遊びなど、ときどきプログラムが入る。

田んぼに向かって庭もあり、そこに設けられたブランコは、カナダなどで見るように座るところが柔らかな素材で出来ていて、座った子どもの体を柔らかく支えてくれる。彼の地では立って漕がせない意味合いもあったが、木下さんは 100 均ショップで見つけて、とっさにブランコに応用しようと思いついただけとのこと。

１回 100 円の協力金以外は受け取らず、場を続けている。地域の親子のために、ひたすら温もりのある場づくりを心がけ、困りごとを抱える親子に伴走し続ける木下さんを、中山さんは「まさに土徳の人」と紹介してくださった。そう笑う中山さんご自身が、土徳の人。南砺市の土地柄かもしれない。

ほっこり南砺外観

めぐみ１階

めぐみ外観

めぐみ１階壁面

めぐみ看板

めぐみブランコ

一般社団法人 Ponte とやま

団体基礎データ
所在地：富山県砺波市宮森 303
従業員数：3名
事業会計報告：　2018 年度は全収入が 800 万円ほど
事業別利用者数と内訳：
事業の運営体制（スタッフ数など）：理事長、理事、従業員、講師 10 名ボランティア 6 名ほど
実施事業サービスと法令との関係：認知症カフェ事業（砺波市）
設置及び運営財源：個人
ＨＰ：https://ponte-toyama.com

1. 主たる事業

みやの森カフェの運営：週 3 日のランチ営業・相談会、当事者会、凸凹キッズのためのプログラム（園芸療法・カフェ体験・こくごの教室・製作活動・プログラミング教室など）、介護おしゃべり会、認知症カフェ（月 1 回砺波市との協働）・就労支援（カフェ内での就労体験）
学習サポート：県内 5 箇所での小中学生・高校生の学習支援、
他に　小学生の運動教室（富山大学との協働）、イベント・フォーラムなどの開催、駅チカ居場所（駅に近い場所を借りて居場所活動・砺波市との協働）、特養「かがやき」での就労サポート事業

2. ここに至るまでの経緯、きっかけ

理事長水野カオルは、20 年間特別支援教育の教員。加藤は 20 年間富山 YMCA フリースクール講師。二人とも、障がいを持つ姉妹がいることで知り合い、意気投合。8 年ほど前から発達障がいなどの生きづらさを持つ子どもたち、若者達の支援活動を開始。5 年前、加藤が終の棲家を建てる際、庭に小さなカフェを作る。ここを拠点にして一般社団法人「Ponte とやま」を 2014 年 7 月に設立。当初介護している人たちが来るためのケアラーズカフェにしようと思ったが、子ども、若者の相談が多数来るようになったため、年齢や状況にとらわれないごちゃまぜカフェに方針を変更した。5 年経った今、赤ちゃんから高齢者、近所の人も県外の人も訪れるカフェになっている。学習サポートや個別相談の需要も増えてきている。

3. 関わってきた人（キーパーソンを探る）、もの、おかね

設立当時は、理事長水野と理事加藤、カフェを手伝ってくれる有償ボランティア 3 名、学習サポートを手伝う学生 5 名などで運営開始。2018 年から会計および広報担当従業員を非常勤で雇用。現在カフェは有償ボランティア 6 名、学習サポート講師は 10 名。カフェの建築、初期費用は加藤が拠出。その後は、二人で収入を確保してきた。行政からの助成は、月 1 回の認知症カフェに委託費が支払われている。駅チカ居場所には場所代が助成されている。それ以外は、カフェ、学習サポート、プログラム参加費、個人相談料、特養「かがやき」での就労サポートの相談料などが収入源。

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

カフェでの雇用は行わず、経験を積んだ有償ボランティアを中心に、はたらく練習をしたい若者などがカフェ営業を回している。本人にとっても客として毎回は来られなくても準スタッフとして参加できることで居場所と働く自信を取り戻していくというメリットがある。現在週 2, 3 回のランチ営業なのでそれで成り立っているが、回数を増やすのは責任者の負担が大きく不可能である。学習サポートも学生が卒業するとそのたびに人の確保が難しい。社団においても現在従業員は非常勤で一人のみ。そのための財政的な圧迫は少ないが、仕事の負担はけっこう大きくなってきている。

5. 地域における連携体制とその実情

小さな社団なので、他の団体、個人との連携が不可欠である。石川県などの他県および富山県内の民間の居場所あるいは制度内の事業所を、地域、困りごとの内容などによって積極的に紹介をしている。最近高齢者関連の事業所とイベントなどを共にすることで連携が取れるようになり、就労の場を提供してもらったり、こちらに相談に来た人の相談対応などをお願いしている。富山大学附属病院の総合診療部、在宅医療専門のものがたり診療所、その他精神科の病院などとも連絡が取り合えるので、医療に繋げやすくなってきている。

6. 行政からの業務委託の有無

ア）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性
認知症カフェ（ほっとなみカフェ）：月 1 回の活動で、25000 円の助成をもらっている。臨床美術と笑いヨガを交互に行っている。地域・年齢・状況がごちゃまぜでもかまわないと言われているので自由な雰囲気で活動している。認知症の相談はここではほとんど入らないが、ふだんカフェのときに少しずつ相談が入るようになってきた。
駅チカ居場所：みやの森カフェは公共の交通手段がほとんど無いため、月に 1 回、駅から歩いて 5 分のギャラリーを借りておしゃべり会をしている。2019 年度限りの助成金で場所代と駐車場代を助成してもらっている。若者達を含めて毎回 20 人近く参加している。

回答者：一般社団法人 Ponte とやま理事　加藤愛理子さん

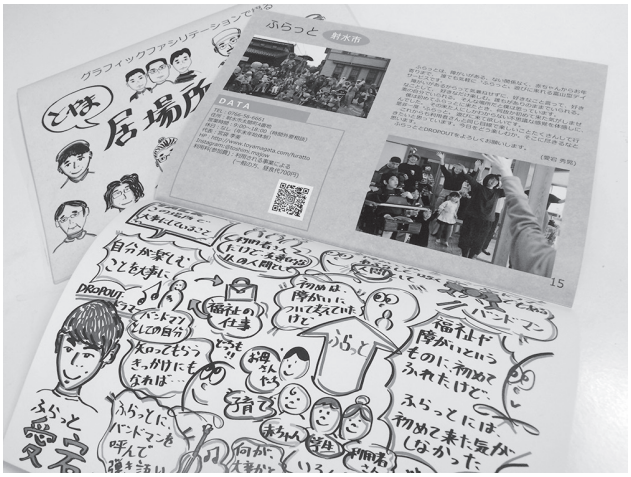
金沢市でヒアリングを行った「日常生活支援サポートハウス」の山本実千代さんから、ご紹介いただいて加藤さんと連絡を取り始めた。山本さん、加藤さんと、さらにもう 1 法人、居場所づくりを行なっている団体同士で情報や意見の交換を定期的に行っている。タイミングよく、一般社団法人 Ponte とやま設立 5 周年記念イベントに参加、その懇親会でみやの森カフェへお邪魔した。関わる方々が一堂に会しただけでなく、みやの森カフェの雰囲気、団体のミッションやポリシーなども十分に感じることができた。
カフェには誰でも横になれるスペースがあり、子育てひろばの親のための昼寝スペースを思わせるようで、この場の緩くてぬくもりの感じられる雰囲気を象徴しているかのようであった。
Ponte とやまには新しくデザイン出版部が誕生、「グラフィックファシリテーションで綴る　とやま居場所×人」Vol.1 と 2 を発行した。富山県内の居場所を運営する人たちのつながりの中から生まれた 2 冊である。ここでは、今回ヒアリングを行なった「特定非営利活動法人ふらっ

と」、「一般社団法人ガチョック」のほか、お世話になった中山明美さんが運営する南砺市内の「ほっこり南砺」などを取り上げている。居場所を運営する人々同士が、出会い、意見や情報を交換し合うのは、日常的なことらしい。これぞネットワーク。訪れた人の困りごとには、ネットワークで知り合った助っ人や機関をつなぐ。ごちゃまぜにつながり、つなげるのが当たり前になっていることが素敵だ。
カフェと団体の立ち上がりについては、「庭に小さなカフェをつくったらみんなの居場所になった一つなげる×つながる　ごちゃまぜカフェ」（ぶどう社刊）に詳しい。

ponteとやま　みやの森カフェ外観

ponteとやま　カフェ内　加藤愛理子さん

グラフィックファシリテーションで綴る　とやま居場所×人



グラフィックファシリテーションで綴る　とやま居場所×人

みやの森カフェを通じて ponte とやまの取り組みを紹介した本

地域包括及び子育て世代包括ケア　先進自治体調査

特定非営利活動法人ふらっと

団体基礎データ
所在地：〒939-0361　富山県射水市太閤町 14 番地
従業員数：正規職員　12 名　非常勤　20 名　このほかに学生アルバイトなど
事業会計報告：平成 30 年度経常収益　86,369,362 円
事業別利用者数と内訳：
事業の運営体制（スタッフ数など）：　平成 29 年度事業報告によれば、職員 27 名体制。
実施事業サービスと法令との関係：
■障害福祉サービス
多機能型（生活介護・生活訓練）事業
指定相談支援事業
射水市地域生活支援事業（地域活動支援センター・移動支援・日中一時支援）
基準該当児童デイサービス事業
富山県単独在宅障害児（者）等デイケア事業
福祉有償運送移送サービス（道路交通法許可）
■介護保険サービス
基準該当通所介護事業
基準該当通所予防介護事業
■子育てつどいの広場事業
設置及び運営財源：　在宅福祉サービス事業収益ほか
ＨＰ：http://www.toyamagata.com/furatto/

1. 主たる事業

自主事業：赤ちゃんでもお年寄りでもどなたでも利用できる居場所。食事もできる。富山型デイサービス。
ダッチファミリー (障がい児の親御さんが留守のときに、留守宅に出向いて子どもと一緒に留守番)
医療ケア児の入院付き添い及び入院中の保育、ショートステイ (いずれも自費)
通所介護
多機能型（生活介護・生活訓練）共生型放課後等デイサービス＆共生型児童発達支援事業
射水市地域生活支援事業（地域活動支援センター・移動支援・日中一時支援）
福祉有償運送（道路交通法 79 条許可）
子育てつどいの広場事業・一時預かり事業
指定特定障害児者・精神相談事業・障害児利用計画等相談支援
指定一般相談支援
学童保育
地域生活支援・交流ハウスふらっとでは上記すべてを、自立支援ハウス DASH では、障害福祉サービス（自立支援給付）生活支援・自立訓練を実施。

2. ここに至るまでのきっかけ

自身の長男が自閉症だったことから、同じ発達障がい児母子たちとサークルを立ち上げ、県外の障がい児支援施策などを視察。親の立場として質の高い場を求めていたので、他県の優れた取り組みは大変参考になった。県教育委員会の後押しもあり、長男は小学校・中学校と地元の公立校に通学、インクルーシブ教育の先鞭をつける。
2000 年、周囲の勧めもあり、公設民営の形で地域生活支援・交流支援ハウスふらっとを開設した。開設に際しては、事業者だけでなく、利用者の家族や地域の方々、行政など、あらゆる方々のサポートが大きかった。
（現在までの経緯は、宮袋さんの自著「バリア・ブレイク」（雲母書房刊）に詳しい）

3. 関わってきた人（キーパーソン）、もの、お金

長男を連れて買い物などさまざまなところへ行ったが、その都度、自閉症の長男は思いもかけない行動に出る。行く先々でさまざまな人に頭を下げることになったが、地域の人とつながるきっかけにもなった。夫が公務員だったので、公務員宿舎に住んでいた。同じ宿舎に住む同じ年頃の子どもに長男が噛み付いたのがきっかけで、子どもの母親と大親友になるなど。

長男を地元の公立小学校に通わせたいと地元教育委員会と交渉、県教育委の後押しがあって小・中と地元の公立校へ。高校は特別支援学校に進学。成人式で小中のクラスメートと再会。何の隔たりもなく当時と変わらぬ元クラスメートたちとの関係に、「息子は地域で育ったと実感した」。

富山型デイサービスの創始者惣万佳代子さんが講演に行くときに、ドライバー役をやっていた。長男を連れて行っていたので、講演が終わるたびに、長男の行動の後始末をしていた。その姿をみていた惣万さんから、公設民営で立ち上げる高齢者と若年層等の交流スペース (現在のふらっと) の運営を任せたいと旧小杉町議会で決まりかけたときに、「自分の子どもも抱えているのに無理」と反対されたが、逆に発奮。障がい児の親にとってどうしても必要なのだと初心を貫いた。

惣万さんが運営する富山型デイサービス「このゆびとーまれ」では、夏に近くの特別支援学校でプールを借りていたが、校長が代わって借りられなくなってしまった。何度交渉しても平行線。当時の県教育長に事の次第をファクシミリで送ると、全県の特別支援学校の校長が招集された。これをきっかけに「富山型デイサービスと特別支援学校との連携協議会」がスタート。富山型デイサービスで障がい者がスタッフとして働いていることが知られたり、特別支援学校に子どもを通わせる親の訴えを見過ごさず、解決に導いたり、双方の相互理解を深める議論の場となっている。また、平成 25 年からは、「特区」ではあるが、障がいのあるスタッフと一緒に働く事業所にも「施設外就労協力金」が入るようになるなど、それまで現場の気概でやってきたことが、制度上、きちんと認められていっている。

現在、宮袋さんの長男もふらっとを利用しているが、スタッフのおかげで、長男との距離がうまく保たれ、長男も落ち着いて一緒にいられるようになった。「この子のために」と熱心にやっていた頃、わが子は荒れていたのが、今は落ち着いててお互いにハッピー。

現在、富山型デイサービスは県内に 130 カ所あり、うち 86 カ所がネッ

トワークに参加しているが、障がい児者支援を行っているのはふらっと１カ所だけ。

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

・鍵をかけられないこと。利用する子どもたちの状態から鍵をかけられないが、鍵をかけないことで利用者が外に出て行ってしまったり、無用心であったりと大変悩ましい。
・理念と経営のバランス取るのは大変。

5. 地域における連携体制とその実情

清掃や畑仕事、昼食作りは、これをやりたいと手を挙げてくれた地元ボランティアの方々。
富山型デイサービス・ネットワーク
富山型デイサービスと特別支援学校との連携協議会
富山ケア・ネットワークなど、県域のネットワークや協議会で、さまざまなところと連携。

6. 行政からの業務委託の有無

ア）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性
通所介護
多機能型（生活介護・生活訓練）共生型放課後等デイサービス＆共生型児童発達支援事業
射水市地域生活支援事業（地域活動支援センター・移動支援・日中一時支援）
福祉有償運送（道路交通法 79 条許可）
子育てつどいの広場事業・一時預かり事業・放課後児童クラブ（以上、子ども・子育て支援新制度地域子育て支援事業）
指定特定障害児者・精神相談事業・障害児利用計画等相談支援
指定一般相談支援

回答者：特定非営利活動法人ふらっと理事長　宮袋季美さん

休日にお邪魔し、建物内で子どもたちがくつろぐ中でお話をお聞きした。こちらがメモを書き込む調査票に興味を示した男児が興味の赴くままに手に取ろうとするのを、思わず必死になって引っ張ってしまった。ムキになっちゃいけないよねと苦笑いしていたら、宮袋さんがうまくとりなして、返してくださった。障がい児には、その子ならではの発達の特性があるので、十把一絡げな対応はできない。いきなり出会って適切な対応をするのは難しい。しかし、強弱はあれど、人間、一人一人特性は違うのだから、対応が難しいのは障がいを抱える人だけではない。
宮袋さんご自身が、自閉症の我が子を授かるとは思ってもみなかったし、なんだか違うなと思いながらの育児のスタートで、自閉症とわかるまでにも時間がかかったという。出かける先でさまざまな狼藉を働く我が子を追いかけ、ひたすら謝り、時にお金を払う。そうしたことが、地域で宮袋さん親子の存在を認知させることになったし、自分のものを買いに行く暇がないから、手元には若い頃に買った派手な色合いの服しかなくて、年相応の格好もできない。しかし、そのおかげで目立つことが、逆によかったかもしれないと笑う。ひたすら前向きに物事を切り開いてきたパワフルな日々は、著書に詳しい。

医療福祉事業に関わる人は、「○○のために働く」の○○のところに利用者とか障がい者、患者などを入れることが多いが、宮袋さんは利用者の日常を守るためのサービスとして万全を尽くそうとしているので、雇用しているスタッフに「なんのために働いてるの？」と尋ねて、「生活のため」「お金のため」という返答に「よっしゃ！　頑張ろう」と思う。もし「利用者」とか「障がい者」という言葉が入るようではダメだという。プロフェッショナルであることへの宮袋さん流の表現だと感じた。

ふらっと道路看板

ふらっと外観看板

ふらっと玄関

宮袋さんの著書「バリア・ブレイク」

地域包括及び子育て世代包括ケア　先進自治体調査

一般社団法人ガチョック

団体基礎データ
所在地：富山県射水市戸破 1893
従業員数：3 名
これまでの事業の歩み：平成 29 年 9 月 22 日設立
事業会計報告：2018 年度　140 万円
事業別利用者数と内訳：5 名
事業の運営体制（スタッフ数など）：3 名
実施事業サービスと法令との関係：障害者就労支援事業 B 型
設置及び運営財源：Youtube への動画アップによる広告収入
https://www.youtube.com/c/gachok
https://www.youtube.com/c/gachokmusic（新規チャンネル開設）
ＨＰ：http://gachok.toyama.jp/

1. 主たる事業

就労継続支援事業 B 型
困りごとや福祉関係の相談・訪問支援
誰でもいられる場所の提供
対象者：困りごとをお持ちの方、障害をお持ちの方、学校にも家にも居たくない方、その他遊びに来たい方
利用料：相談　無料 / 居場所利用　300 円 / 自宅訪問　3000 円
開所時間：9：00 ～ 17：00

2. ここに至るまでのきっかけ

澤田さんは、もともと病院で働くソーシャルワーカーだった。30 歳のときに一人で波照間島を旅行した。そこではびっくりするくらい誰も働いていない。価値観がまったく違う。周囲の期待や価値観でがんじがらめになっていた澤田さんは、「これでいいんじゃない？」と衝撃を受けた。「仲間たちと自分で事業をやっちゃう？」
福祉畑だったので、できることは福祉。福祉の世界で生きていこうと改めて決めた。自分たちが仕事をしていて、かゆいところに手が届かなかったところや、制度を使うと対応できなくなってしまう人たちを助けてくれる人がいるといいよね、自由に動けるワーカーがいたらいいと思い、起業を決めた。
不登校や引きこもりの若者がいられる場所づくり。障害者の就労支援として、まともにしっかり働くのは難しいし、納期があると追われてしまう。納期もなく、対人スキルも必要がない仕事として YouTube に動画をあげてフォロワーを増やし、広告収入を得る方法を考えた。YouTube の収益化要件を満たし、広告収入が得られるようにした。動画サイトでは、その動画が好きな人がフォロワーとなって集まってくる。再生回数増を目指して、次々にコンテンツを増やしていった。2 つのチャンネルを運営、ひとつは動画数 1300 本を超え、フォロワー数も 1 万人を超える。あたらしいチャンネルでは、さらにアイデアを凝らした動画アップを目指している。

3. 関わってきた人（キーパーソン）、もの、お金

思いを同じくするスタッフ 3 名（社会福祉士、精神保健福祉士、教員

免許）と、利用者 5 名。
登録したいという人は増えている。
法人としてお金儲けにつながる事業は行わないが、就労継続支援事業 B 型を通じて、（利用者にも法人 = スタッフにも収入をもたらす）収益が得られるように考えている。

4. 運営のコツ、運営上で苦労していること

お金をどうやって回すか。
居場所運営は、お金にならないのに手間がかかる。ビジネスモデルとしては破綻している。
近所に住む大家さんのご厚意で、家賃 55,000 円のところを 50,000 円にしていただいた。先月ようやくスタッフ一人につき 6 万円の給料を支払えた。もちろん社会保険料天引き後の手取り額。

5. 地域における連携体制とその実情

清掃や畑仕事、昼食作りは、これをやりたいと手を挙げてくれた地元ボランティアの方々。
富山型デイサービスネットワーク
富山型デイサービスと特別支援学校との連携協議会
富山ケアネットワーク　など、県域のネットワークや協議会で、さまざまなところと連携。

6. 行政からの業務委託の有無

ア）委託を受けている場合の委託内容と行政との関係性
就労継続支援 B 型事業所

回答者：一般社団法人ガチョック代表　澤田啓輔さん

民家まるごとが居場所。その1室で就労継続支援事業B型としての動画作成機材を運び込んで作業をしているようだ。人とのコミュニケーションが苦手でも、自ら動画を作ってサイトにアップすることは出来る。良い着眼点だと思った。
案内役の加藤さん、中山さんだけでなく、宮袋さんも同行。富山型デイサービスの現状などについても、澤田さんも交えてあれこれお聞きするひと時となった。

ガチョック外観

ガチョック看板

ガチョックなんでも相談看板

ガチョック作業場